

Keiba Global Front Line

競馬グローバル・フロントライン

競馬の最前線で活躍する馬や人を紹介致します



合田 直弘

2月2日に東京競馬場で行われたG3根岸S(d1400m)を、そこが初ダートだった18年のG1安田記念(芝1600m)勝ち馬モズアスコット(牡6、父フランケル)が制し、新たな二刀流誕生と話題になつたが、時を同じくして中東に出現した二刀流の遣い手ベンバトル(牡6、父ドウバウイ)が、今月のこのコラムの主役である。

ニユーマーケットを拠点とするロジャー・ヴァリアン師が管理し、ロンシャンのG1オペラ賞(芝2000m)、ベルmontパークのG1フラワー・ボウルS(芝10F)などを制したナーレイン(父セルカーク)が、母となつて初めて産んだ仔がベンバトルだ。

サイード・ビン・スルール厩舎からデビューし、3歳4月にドンカスターのメイドン(芝7F)で緒戦勝ち。G3クレイヴンS(芝8F)3着、G2ダンテS(芝10F 56y)2着と、クラシック前哨戦で好走した後、G1英ダービー(芝12F 6F)に駒を進められたベンバトルは、手綱を任せられたオイシン・マーフィーが最後方待機という思い切った戦法をとり、勝ったワイングスオヴァイーゲルスから3.1/2馬身差の5着に追い込んでいる。

ダービーで見せた際立つた末脚がファンの目に止まり、いつかは大仕事をする馬との期待を集めたが、これに応えることが

出来たのは4歳になつてからで、ヴィブロスを2着に退けてG1ドバイターフ(芝1800m)を制し、待望のG1初制覇を果たしたのは、18年3月だった。4歳時の同馬は7月に独国で行われたG1バイエルングフトレーン(芝2000m)を、10月に豪州で行われたG1コーフィールドS(芝2000m)を制し、芝10F路線では世界でも五指に入る存在となつた。

5歳時の同馬は秋まで戦線を離れ、わずか2戦してG2ジョエールS(芝8F)を勝つたのみに終わつたが、そのジョエールSが5馬身差の完勝で、このパフォーマンスをもつて世界ランキンギングの第9位に名を連ねている。

ベンバトルは、6歳緒戦となつたメイドンのG2シングス・ペールS(芝1800m)を4.3/4馬身差で快勝。定石を踏むなら、この後はG1エベルハタ(芝1800m)から、2年振りの優勝を目指すG1ドバイターフというのが想定された路線だった。

ところが、実際に同馬が登場したのは、2月6日にメイドンで行われたG2アルマクトゥームチャレージ・ラウンド2(d1900m)だったのだ。デビュー20戦目にして初のダート参戦は、同馬を所有するゴドルフィンの総帥シェイク・モハメドのアイディアと伝えられているが、ここで同馬は、メ

を勝つての参戦、だつたミリタリーロウ(騎5、父ドウバウイ)に2馬身差をつける快勝。ちなみに3着は、昨年のG1ドバイワールドC(d2000m)2着馬グローネックス(牡5、父ロンロー)だった。

前述したように、ベンバトルの母は芝のG1勝ち馬で、父ドウバウイも芝のG1勝ち馬。ミルリーフの5×4を持つ他、ダンシングブレーヴ、カーリアンらの名前が見える同馬の配合は、ダートのエッセンスを強く感じさせるものではない。その一方で、ドウバウイは父としてこれまで2頭のドバイワールドC勝ち馬を出している中、12年のモンテロッソは路面がタベタ、だが、15年のプリンスビションズはダートだった。

そしてドウバウイの父ドバイミレニアムは、ナドアルシバのダート2000mのコースレコードを樹立して2000年のドバイワールドCを圧勝した馬である。さらにトッティーラインの4代目は、言わすもがなのミスタープロスペクターだ。

見据える先に3月28日のG1ドバイワールドCがあることは言うまでもないが、その前に、2月29日に行われるサウジC(d1800m)にも登録のあるベンバトルが、どんな路線を歩んでいくのか。2020年の世界の競馬における大きな見どころとなりそうだ。